

中国東北(北滿州)鉄路の旅「ハルビン・長春(新京)・黒河」の記憶 3

9月21日。黒河国際飯店はロシア人の姿が見えなく淋しかった。

黒河では日本語の通訳が手配できなくてロシア語の通訳が代役、通し添乗員の王通訳は黒河が初めての土地であり心もとない観光案内だった。

昨晩は黒河時報の記者邸さん(同じNTTのOB山崎さんの紹介)をホテルに呼んで黒河小学校の終戦時の様子を聞いたが「沢山の日本人が自決して死んでいたとしか知らなかった」また1946年ソ連から逆送された日本人捕虜3000人について知らないかと聞いたところ「話としては聞いているがもう65年前のことだし当時の事には関与しないほうが無難ですよ!」と云われた。

「流氷の黒龍江」の写真を見せて案内してほしいと頼んだところ、怒ってそこへは案内出来ない、当時の建物なら健在なところがあるから、そこで聞いてみたら」と怒って帰ってしまった。

そこは黒河検察庁だった。満州時代は「黒河特務機関」ヤバイと直感した、党と直結している人間に「黒河事件」の事を話して足止めでもされたら大変と思った。

一度はバスから降りたが皆をバスに乗せて当時住んでいた官舎付近の高台の南崗屯へとバスを進めて黒龍江を挟んでプラゴエスチェンスクの街を遠望出来ると思いきやビル群が視界を遮り遠望はもう出来なかった。

「黒河事件」とは

1946年にソ連は身体の弱った日本軍捕虜を黒河に逆送した、最低でも1200名以上、一説には3000名程がプラゴエスチェンスクから黒河へ逆送され半数程が名前も分らず死んでゆき、600名程残った捕虜は1946年6月21日に脱走したのが事件の始まり。

その当時、国民党(光復軍)と中共軍(八路軍「林彪」)の内乱に巻き込まれ、脱走を図った日本軍捕虜500人以上が虐殺された。針金で数珠繋ぎのまま日本刀で突かれ黒龍江に放り込まれた人は80人はいるという。日本へ帰った人達は125名だそうです。病人が多く将校以上は処刑されて、氏名の記録等も少なく実際の人員把握が出来ていませんでした。ましてや、鉄道は黒河と北安間、約300kmの線路はソ連軍が持ち去り日本への引き揚げた人たちは300kmを歩いたそうです。途中孫呉まで第135旅団・第123師団展開地は異臭街道で死体が道路の両側に延々と続いていたそうです。



画家 小沢小善治 作品
当時満州国政府委任官であり
黒河特務機関員。作品は漠河
となっているが黒河のゼーヤ
川と黒龍江の合流地点の断崖
付近。5月中旬。



旧黒河特務機関
現黒河人民院検察庁

「特務機関」とは

旧日本軍の特殊軍事組織をいい、 諜報 ・ 宣撫工作 ・ 対反乱作戦 などを占領地域、或いは作戦地域で行っていた組織で警察と憲兵の権力を持った機関。

環揮城記念館は 1958 年に帝政ロシアと清国との間にアイグン条約を締結した地です。此処にはその時にアイグン部落の中国人 3000 人がロシア兵に虐殺された状況をジノラマで参観出来るようになっていたが工事中で残念でした。関東軍第 135 旅団跡は整地されて痕跡は見えませんでした。



対岸ブラゴエスチェン
スクは建築ラッシュの
様だ今ロシアは景気が
良いからか？



記念館入口までロシア兵に虐殺された家族名を刻んだ石が置かれており、右側には鐘が 3000 個虐殺された人数吊るしてありました。



アマール河の魚。
皇魚（チョウザメ）
は切り売り、六五年
前には色々釣った
が見覚えのない魚
ばかりだった。皇魚
は切ったのが配給
されおもしろかった。



こんな小さな最果ての街にも歩行者天国があり賑わっていた、商店には中国語とロシア語の看板がありアメリカ化された我々には奇異だった。

中国の経済のなせる技か 9 年前とは大きく変革しておりビルが連立しており、今浦島太郎だった。もう懐かしさを感じるのは黒竜江の流れだけ？それも黒い流れが松花江のように黄色くなる時があるそうです。私が住んでいた南崗屯の湿地帯にも建築物があり温暖化は此处北緯 50 度線にもはっきりと表れていました。

同行した皆さんは支那を連想して旅に臨んだかもしれませんが私を含め残念でした。

もう来ることはないでしょう遥か昔過ごした少年時代を！

黒河の街にはあまりにも時間が経ちすぎた、あの小菊やクローバーの原っぱはもうないあるのは、道路とビルばかり。



ネオン輝く黒河駅省エネなんか何処吹く風



原っぱだった駅前にはビルか？ネオンサインが輝かしい。

黒河からハルビンへ 11 時間の寝台列車（軟臥車）の旅へ。

